第２節　「普通」というアイデンティティの構築

「語ること」は生活のあらゆる場面に出現する。私たちは、単なる空気の振動である発話から、その人の声の質、言語構成を聞き取ることができる。そしてそれ以上に、私たちは、語りから、相手が何者か、どのような人物かを読み取ることが可能である。語ることは、自分をディスプレイする機能を持ち、いわば個々人の表情が刻印され、可視化されるアイテムとして用いることができる。

本研究においては、語ることは自分のアイデンティティを社会的に表示し、生成するものと考える。Tajfel & Turnerは、私たちが、自分自身をある集団の構成員であると認識することを、社会的アイデンティティ理論として提唱している。この社会的アイデンティティ理論によれば、社会心理学的過程の中で、個人が採る言語方策の中に、ある個人が同一視している集団を観察することができるとされる。

さて、本研究におけるインタビューでは、不良というテーマを提出し、数々の質問をしている。そして、それら問いかけに対する高校生の語りが存在するわけである。
先にも触れたが、インタビューを受けた高校生は、「普通」というアイデンティティを幾度となく我々に提示している。

まずは、高校生がどのように「普通」というアイデンティティを顕示しているか、以下に見ていきたい。

《断片5-1.　グループ1》

382 面接者2：君らは、君らの行動とか服装とかはまじめな方だと思う?全国の高校生と比べたとしたらまじめな方だと思う?
383 高校生2：それは言い切れる。
384 面接者2：言い切れる。
385 高校生1：私たち普通だよね。
386 面接者2：普通か。
387 高校生2：っていうかお父さんとかお母さんから見たら、普通の高校生ねって感じで。
388 面接者1：安心させといて、裏じゃひどいとか、そういうのはない。
389 面接者2：同じ高校生の視点でみると...
390 高校生2：まじめじゃない?
391 面接者3：あぁ。
392 面接者1：一般的にさ、不良ってのはさ、憧れの対象になったりするのよ、かっこいいとかさ、そういうことないすか。いや不良とは言わない、例えば夜遊びしたいとか、ピアスあけたいとか、茶髪にしたいとか、すげぇ服きたいとか、そういうのはないの。
393 高校生　：（5秒間の沈黙）

高校生は、とにかく「普通」という言葉で自分たちを言い表そうとしている。積極的な「普通な私づくり」を展開しているのである。

そして、この「普通な私づくり」は、私たち面接者との対話の中で、私たちの「非行に関する問いかけ」と対になって達成されている。例えば、グループ1の392において、面接者は非行文化への憧憬をトピックとして掲げながら（非行に関する）問いを発している。それに対し、高校生は、393にあるように積極的な返答はせず、沈黙を守っている。しかし、インフォーマントの積極的な姿勢を抽出する要素は、インタビューアの質問に即答することに限定されるのであろうか。インフォーマントが十分な日本語能力を持っているという前提がある限り、392～393で観察されるやり取りも積極的な姿勢として捉えることができる。つまり、非行に関するインタビューアの誘導にノッテこない、ということは重要な情報として浮上してくるのである。

《断片5-2.　グループ1》

312 面接者3：髪の毛の茶髪ってのは、普通にいるの。
313 高校生1：普通。
314 高校生2：茶色は、みんなやってる。
315 高校生1：普通。
316 面接者2：そんなんじゃ不良にはなんねぇよなぁ。
317 面接者1：でも君らの学校じゃいけないんでしょ。茶髪は。
318 高校生1：うん、一応。
319 面接者2：でも、君らの目からみたら、特に不良じゃない。
320 高校生1：うん。
321 面接者2：街中でそういう人をみても。
322 高校生2：みんなでも染めてない子の方が珍しいよ。

《断片6.　グループ2》

430 面接者1：優等生なんてのはいる?
431 高校生1：いる、あ、でもいないね。優等生じゃないもんね、○○はね。
432 高校生3：前、学校きて、休み時間も勉強して。
433 高校生1：図書室とかで勉強してんですよ。休み時間。
434 面接者1：休み時間に。
435 高校生1：昼休みに。
436 面接者1：仲良く話してる?
437 高校生1：うん、別に普通に。
438 高校生2：宿題写させてくれる。
439 面接者1：いい奴だね。君らは優等生って訳じゃない。
440 高校生1：俺ら普通だよね。
441 面接者1：普通か。

442 高校生2：普通。
443 高校生3：普通。
444 面接者1：普通というと?

繰り返し語られる「普通な私」像は、どのようにして産出されているのか。インタビューアは、不良、逸脱に関しての語りのアウトプットを想定してインタビューを実施した。そして、インフォーマントは、このインタビューアの想定を汲み取り、この視点がズレていることを積極的にアピールしようと、自分たちが合点のいくカテゴリを提示する。インフォーマントはこのカテゴリを説明する手段として、「普通」という言葉を選択した。個人や、個人が所属する集団を説明するのに、個人の内から承認し、正当化していく具体的な方略をとったのである。勿論、繰り返し述べてきたように、個人の内からの判断基準で語るには、対極にある外からの判断基準が必要である。インフォーマントがノッテこない、ピントはずれなインタビューアの質問は、この外からの基準を無効にする原動力として作用していたと考えられるのである。

従来の研究では、逸脱行動を考える際、逸脱の問題を逸脱行為の問題にのみ限定して考察しようとしてきた。科学的研究は、常識的前提、つまり社会的規則の違反行為にはなんらかの固有な逸脱性（質的な特殊性）が存在するのだという常識的な臆断を容認してきたのである。「逸脱」のレッテルを特定の行為や人間に適用する際、研究者は通常そのレッテルを疑問視せず、むしろ所与のものと見なしている。
しかし、本研究でも焦点を当ててきたように、集団、そして集団に属する個人は、これを犯せば逸脱となるような規則をもうけ、それを特定の人々に適用し、彼らに「逸脱」のレッテルを貼ることによって、逸脱を生み出すのである。この観点からすれば、逸脱とは人間の行為の性質ではなくして、むしろ、他者によって、規則が逸脱者に適用された結果なのである。逸脱者とは首尾よくこのレッテルを貼られた人間のことであり、また、逸脱行動とは人々によってこのレッテルを貼られた行動のことなのである。